

# 楫取魚彦自筆 土佐日記縣居説 (上)

## 凡 例

一、これは倉野憲司博士所蔵本を忠実に活字にうつしたものである。

一、本号にはその前半を掲げ、後半は第十二号に採録する。

一、本書については既に同博士が「文学」第八号（昭和七年一月）に解説して居られるので、ここでは解説を省いた。（同博士著「上古文学論攷」に所収。）

一、濁点・句読点は原文に従った。

一、適宜段落を分けて、段落ごとに傍註・頭註を記した。

一、傍註は左右ともに（１）（２）（３）で示し、註者の意見は（ ）で囲んだ。

一、頭註は（イ）（ロ）（ハ）で示し、傍註の次に掲げた。

一、句間に多くの分註が施されてゐるが、便宜「」の中に一行に書き改めた。

一、註の中の細註は（ ）の中に一行とした。

一、虫損の文字は□で示した。

（井手恒雄・古田東朔）

## 土左日記

をとこもすなる、日記といふ物を、女もしてこゝろ見んとてするなり、それのとししはすのはつかあまりひとひの日のいぬの時にかとです、そのよしいさゝか物に書つく、〔家集・延長八年に京を出て今承平四年十二月廿一日に国をたつ也ひとひと云て聞ゆるを又日といふは廿一日と云てその日のと云意也成の時は初夜也此時館を去を云なるへし〕ある人あかたのよとせいつとせはてゝ、〔あがたは班田の意にてゐる中を云貫之ぬし土佐の守にて下りて其任果てのほるよしなるを女のかけらんさまにある人とは云りまけの限りの事は令の時四年なりしを天平宝字二年に六年とし給へり（続紀）又其後に四年に成けんさて後また仁明天皇の承和元年七月諸国の守介者以四年可為限但陸奥出羽太宰府謂之関国始自筑前等二避在二千里一以五年可為年限此定をも四とせ五とせとはかきたりさて土左も限は四年なるべけれどもその下りし延長八年もとの末か今上れる承平五年は十二月廿一日に土左を立て明る年二月京へつきしかは彼是前後を合せて六とせはかりになりぬへしよりて末に五とせ六とせのうちに千とせや過にけんとも書たり〕れいのこともみなしをへて、げゆなどとりて、〔国守任国のあひた正税公解なとうけとりをさめたる勘定などしをはりて既に出立さまなりげゆは解由也国司年々の年貢等うけわたせる計帳を勘解由使におくるに勘解由の判官主典勘定して目録をつくり其長官次官に告せは長官次官大政官に告て連署

をなして奏聞して後国に行ひ下す也此解由状をとりてといふ事也百寮訓要抄に（勘解由使の事）諸国の参朝四度解など申て年貢をたゞしかんがへて国司の善悪をつかさとる也といへり〕すむたちよりいでゝ、ふねにのるべきところへわたる、かれこれしるしらぬおくりす、〔妙寿本しるしらす和名に土左の国府は長岡の郡に在よし見えたり此国府の館より出て舟にのるへき所の家あるにうつりわたる也〕としごろよくくしつる人々なんわかれかくおもひて、その日しきりにとかくしつゝのゝしるうちに夜ふけぬ、〔よくくしつるとはあるか中にしたしく相ぐしともなひし人々也わかれをしみてかたらひうまのはなむけなとなり〕

（1）今本すといふなる（2）別の物に書といふなるへし（3）その守をさすへきを是をもきといはんはいかにそとて或人と書る也（4）その日妙本

（イ）魚彦云あかたは六とせに一度つゝ御使立て田をあがち給はるよりいふ也る中は田居の中をつゝめたる語也（ロ）遠き国の任は五とせ近き程の国にはもとの如く四とせのおほんさためなりし也（ハ）よく治めて任を延る事は大方は有ましき事也たゝ解由を得ぬかのほりかたき是有へし（ニ）正税とは諸国の御倉にをさめおく稻穀也公解とは令集解に供給官人之物謂之公解物也此物安置処謂之公解と見えて官人に給ふへき米粟を蓄おく所を云也

廿二日いづみの国までとたひらかにねかひたつ、〔和泉は終に舟のつくへき所なればはるかに今よりかけてねかふなり〕ふち

はらのときさねふなぢなれどうまのはなむけす、〔言実土左  
国人なるへしうまのはなむけは物へゆく別れに馬の鼻をかなたへ  
むけてつゝかもなくてよなといふほとこの事を本にて後にはその馬  
のはなむけの別の料に酒のませなとするをいへりさて馬は陸に有  
事故にこゝには舟路なれとゝいへる也〕かみなかしもゑひあき  
て、いとあやしうしほうみのほとりてあざれあへる、〔されは  
洒麗の音也あはあまへるを略しいふか源氏にあされたる大君すか  
たなと云にて思へ左礼の字也といふ説は誤れり〕廿三日やぎのや  
すのりといふ人あり、この人くにかならずしもいひつか  
ふものにもあらずなり、〔妙寿本には山の康教とありいつれかま  
ことならん新撰姓氏録に八木ノ造も山公も見ゆきて此人は尋常の国  
人のなみに国守に召つかはれなとすへき物にもあらずと也〕これ  
ぞたゞしきやうにてうまのはなむけしたる、かみがらにや  
あらん、国人の心の常として、いまはとて見えざるを、  
心あるものはぢすぎなんきける、〔御名の語を避るは今上と  
其御父天皇のをはさくる例なり後／＼までさくることなし〕これ  
は物によりてほむるにしもあらず、〔馬のはなむけの贈り物有  
によりてほむるにはあらずとなり〕

(1) イ无 (2) イと (3) 妙本言実 (4) 今本かみしなかも (非  
也) (5) 古本ざりき (よし) (左註) ざ (か) (6) さ妙 (7)  
今本そ (あしゝ)

(イ) 言をさきに用しはおほつかなし (ロ) はちすそとは理

りなし一本を用へし此過は皆人は恥をおもはてとはぬを此人は  
それを過越て恥る故に来るといふなり

廿四日講師うまのはなむけしにいてませり、〔古は諸国に  
国分寺あり是其国の僧尼の司也延暦寺并に諸大寺の三綱 (上座寺  
主都維那) これに任せり是を講師と云也延喜式玄蕃式云凡延暦寺  
三綱一任之後任諸国講読師其上座寺主任講師都維那任読師〕あり  
とあるかみしもわらはまでゑひしれて、一もじをだにしら  
ぬものしか、あしは十もしにふみてぞあそぶ、〔しれては癡  
の字を訓酔てしれものとなれる也〕

(1) らがなるへし

廿五日かみのたちよりよびにふみもてきたり、〔是は今の  
土左の守の館より前の司をよぶなり〕よばれていたりて、日ひ  
とひよひとよとかくあそぶやうにてあけにけり、

廿六日なほかみのたちにてあるにあるじしものしりて、  
〔あるしはまらうとに變するをいふ〕をのこらまでにものかつ  
けたり、〔ぬしたちにはもとよりにて従者のをのこらまでにきぬか  
つげしなり〕からうたこゑあげていひけり〔詩をうたへるなり  
源氏にはもろこしの哥といへり〕やまとうたあるじもまらうど  
もこと人もいひあへり、〔主をさきに書るはまらうどかたのふみ  
なれはにや〕からうたはこれにえかゝす、やまと哥あるしの  
かみのよめりける、

みやこいでゝきみにあはんとこしものをこしかひもな

くわかれぬるかな

となんありければ、かへるさきのかみのよめる、

しろたへのなみちをとほくゆきかひてわれににべきは  
たれならなくに「遠き海路を行かへりからきめにあへるわれ  
に似たる人は誰にあらず君にこそといへりゆきかひは万葉に往反  
をよみたりこゝは今の守と我と往反るをいふならん」

こと人々のもありけれどさかしきもなかるべし、とかくい  
ひてさきのかみい<sup>(2)</sup>まのも、もろともにおりて、いまのある  
じもさきのもてとりかはして、あひ<sup>(3)</sup>ごとにこゝろよけなる  
こととしていでにけり、「おりては此館を出るに主も階よりおりて  
送るさまなりあひことは辭言也かどてのことふきなといひかはす  
るを云なるへし」

(1) 古ニなし (2) も古 (3) 階より (4) 語 (5) 語

廿七日おほつよりうらどをさしてこぎいづ、かくするう  
ちに京にてうまれしをんな<sup>(3)</sup>こゝ<sup>(4)</sup>にしてにはかにうせに  
しかば、このごろのいでたちいそぎを見れどなにこともい  
はす、京へかへるにをんなこのなきのみぞかなしみこふる、  
「浦戸は大海と入海とをへたてゝさし出たる所也大津より南へ二里  
はかり也其古府より三里余也今の府よりも三里はかり也そこをさ  
してと先いひてさて大津よりそのつゝきの鹿子の崎の事有いてた  
ちいそきは旅たちの設也いそぎを見れとゝいふは女のさま也○の  
みそといふは帰るよろこひの中に此事のかなしみあるをいふ」  
ある人々もえたへず、「その父母のみならずなり」このあひた

にある人のかきていたせる哥、

みやこへとおもふものゝかなしきはかへらぬ人のあ  
ればなりけり「宇治拾遺物語に今はむかし貫之がときのか  
みに成てくたりて有けるほとに任はてゝのとしなゝつやつはかり  
の子のえもいはすをかしけなりけるをかきりなくなしうしける  
がとかくわつらひてうせにければなきまとひてやまひつくはかり  
おもひこかるゝほとに月ころになりぬれはかくてのみあるへき事  
かはのほりなんとおもふにちこのこゝにて何とありしはやなとお  
もひ出られていみじうかなしかりければ柱にかきつけける 都へ  
とおもふにつけてかなしきはしかくこゝはこの日記にたかへる事  
とも有は後に聞伝へて書し物なればなり哥も是には即貫之の哥と  
すれと日記には自のとせずすへてみつからのをひとのなる振に書  
るもおほかれはいつれにてもありなん」

(1) 妙大津より浦戸 (2) こは先に有し事を今書出たる也 (3)  
古たり (4) 一本くにゝて (あしし) (5) 古に (むかしはか  
くよむへしもと云は後の常也)

(イ) 魚彦云こぎいつと有て此所に浦戸云々の注あるへしさて  
かくするうちに□□ありていてたちいそぎはと云注あるへし  
(ロ) 常樹云大津此国の古の国府より今道一里余西南の方にあ  
り長岡郡也

またあるときには、

あるものとわすれつゝなほなき人をいづらととふぞか  
なしかりける 「万葉巻四に夢之相者苦有家里覺而

撫探<sup>カキサクレトセテ</sup>友手<sup>ニモ</sup>二毛<sup>ニモ</sup>不<sup>フ</sup>触<sup>レホ</sup>者<sup>ハ</sup> 似<sup>ニ</sup>たる意ありいつらはいつこにをるそ  
と云か如し

といひけるあひだに、かこのさきといふ所に、かみのはら  
から、またこと人これかれ、さけなどもておひきて、いそ  
におりゐてわかれがたきことをいふ、かみのたちの人々の  
なかに、このくる人々ぞ心あるやうにいはいはれほのめく「かこ  
のさき妙寿本には鹿兒崎と書り土佐の国也播磨の鹿子水門にはあ  
らすかみのはらからとは今の守の兄弟也さけなにとは酒や何か  
となり心あるやうにとは哥よむ心有を云にや」かくわかれがたく  
いひて、かの人々のくちあみももろもちにて、このうみべ  
にてになひいだせる哥、「口網は物いし料□金人の口をか  
ざりたる形のもろこしの明堂に有といへりそれを本にてやいふら  
んこゝは哥よみ出るにかたき人をいふと見ゆ今くちおもきと云ふ  
に同じもろもちとはその人く皆同じほとに持たる口おもきなる  
を云か又は互に助けてよむといふにやになひ出るとはもろもちと  
云より出たる語にてやうく」とよみ出たるさまなり」

をしとおもふ人やとまるとあしがものうちむれてこそ  
われはきにけれ「別ををしとおもふといふに駕<sup>ツ</sup>をそへた  
り拾遺集にもわかれちをしとおもふつるきはにとよめりをし  
といふから芦鴨といひてうちむれてといはん料とせり」

といひてありければいいいたくめで、ゆく人のよめりけ  
る、

さをさせどそこひもしらぬわたづみのふかき心を君に  
見るかな、「李白<sup>リ</sup>か汪倫<sup>ワン</sup>にあたる詩に桃花潭水深千尺不及汪  
倫送我情そこひとは万葉卷十五に安米都知乃曾許比能宇良（裏也）  
爾安我其等久伎美爾故布良牟比等波佐禰安良自と□□天地のさき  
くの涯をいひて下底のみ云にはあらす然れば海なと深き涯をも  
そこひといふなりさて比はもと添る語にて浜備浦備などの備の如  
く方<sup>カタベ</sup>の意なるへし万葉に野のそき山のそきと云もこひ反きなれは  
のゝそこひ山のそこひと云にて野の涯山のかきりと云也」といふ  
あひだにかちとりものゝあはれもしらで、おのれしさを  
くらひつればはやくいなんとて、しほみちぬ風も吹ぬべし  
とさわげば船にのりなんとす、「いせ物語にかきりなくとほく  
もきにける哉と佗あへるに渡し守はや舟にのれ日の暮ぬと有はこ  
ゝによりて書るなるへし」此をりにある人くをりふしにつ  
けて、からの哥どもと<sup>(4)</sup>きに<sup>(5)</sup>につかはしきいふ、またある人、  
にしくになれどかひうたなどいふ、「唐人の陽関などうたふや  
うに餞別の折にかなひたる古詩を吟じたるかかひうたは古今集に  
二くさ有か中に かひかねをねこし山こしふくかせを人にもかも  
やとことつてやらんでふを此送りきたる人々もと都の人なれば京  
におもふ人なきにしもあらねば楫取の風も吹ぬへしといひさわく  
につけてその風を人にもかな言伝云やらんでふ意にとりてうたへ  
るにや」かくうたふに、ふなやかたのちりもちり、そらゆく  
雲もたゞよひぬと云なる、「この折から風いとふきてちりなと  
飛を此哥にことよせて或人のいひけんよしなるへしふなやかたは

和名抄に蓬庫（布奈夜加太）舟上屋也うたうたひてちりのたゝよふと云事は漢に有<sup>二</sup>虞公<sup>一</sup>善歌能令梁上塵起といへりそらくゆゑもたゝよひぬとはこれもうたうたひて行雲をとめし事有<sup>二</sup>列子<sup>一</sup>に秦青てふ人薛譚てふ人を別るゝ時撫<sup>レ</sup>節悲歌声振林木響遏行雲といへり」こよひうらどにとまる、ふちはらのときざねたちばなの<sup>(9)</sup>すゑひらこと人々おひきたり、「こゝにてうら戸につきぬ橋のすゑひらも国人なるへし」

(1) 大津とたゝ並てあり(2) 今本なにと(あしゝ)(3) その心けしきに見ゆる意也(4) 古に死(5) 妙本時に似合しきをいふ(6) を古(7) の古(8) 妙本言実(9) 同季衡

廿八日うらどよりこぎいでゝおほみなとをおふ、「大湊土佐国なりおふとはしたふ意也」このあひだにはやくのかみのこ、山口の千岑、さけよきものどももてきてふねにいれたり、ゆくゝのみくふ、「はやくの守は貫之より前の守をいふ彼前司の子千岑といふ人国のさるへきものゝむすめのはらなとに生れてとゝまりあたるにや山口氏は姓氏録に武内宿禰の後也」

(1) 妙本

(イ) 魚彦云万葉六(三十六丁)にかしこの坂にぬさまつり吾はそ追へるとほき土左ちを此追ふ同きか此詞船の上に云か追風ともしふめり

廿九日大みなとにとまれり、くすしふりはへてとうそ白散さけくはへてもてきたり、心ざしあるにいたり、「源氏若紫にかくふりはへさせ給へるとあるか如くわさところへふりはへ

来し也とうそは妙寿本に屠蘇とあるに同じ延喜式に屠蘇一劑治<sup>二</sup>惡氣<sup>一</sup>温疫<sup>一</sup>辟<sup>二</sup>邪氣<sup>一</sup>毒氣<sup>一</sup>云々本草に屠蘇酒陳延之小品方云此華佗方也元旦飲之辟疫癘一切不正之氣造法也白散延喜式に白散一劑元日御藥歳旦以温湯服五分一家有藥則一里無病帶是散病氣皆消年中行事哥合注に(二条関白御説)屠蘇白散の事弘仁年中にはしめらる三ヶ日の間此事あり

元日なほおなじとまりなり、白散をあるものよのまとて、ふなやかたにさしはさめりければ、風に吹ならさせて海に連れてえのますなりぬ、「夜もすから風の吹たるをふきならさせてと云と見ゆ」いもしあらめもはがためもなし、かうやうのものもなきくになり、もとめしもおかす、「一本芋も海布も坂田めも(坂田めわろし)或人芋あらめなと元日に用ゆと今はあらめ用る事なし昔は用しにやはかため世諺問答に問同日齒固といひてもちひかゝみにむかふ事はいかなる事そや人は齒をもちていのちとするかゆゑにはと云文字をよはひともよむなり齒かためはよはひかたむる心也(齒をくひかたむるてふ意のみなりよはひなといふは例のくせなり)もちひは近江国火切のもちひを用へき事也さて正月のかゝみにしてむかふ時は古今集入たるあふみのやかゝみの山をたてたれはかねてそ見ゆる君はちとせはといふ哥を誦するなり」たゞおしあゆの口をのみぞすふ、此すふ人々の口をおしあゆもしおもふやうあらんや、「一本のみそすふ人々の云々こは語の落しならん江次第にも元日押鮎一杯煮塩一杯と云事侍り拾遺集物名におしあゆはしたかのおきゑにせんとかまへたるおしあゆ

かすなねすみとるへし早と書て遊仙窟にくちすふとよめり此あゆを食事<sup>(4)</sup>を戯てかけるなり」けふはみやこのみぞおもひやらるゝ、こへのかどのしりくめなはの、なよしのかしらひゝらぎらいかにぞとぞいひあへる、「妙寿本九重（わろし）の門の端出之繩の鯰魚のかしら云々こへのかとゝは小家の門なるへししりくめなはゝ日本紀に左繩端出とも端出之繩とも書り神前にかくる注連也和名抄に端出之繩読与注連同とありしりくめ繩は□□の物をへたつるしるしのみなりなよしのかしらは今山中入ものは塩いわしをやきて又をこせのほしたるをもて入にをこせをは山の神のとるなりいわしにはいとおそれてわさはひせぬなり然れば今もいわしを用ゆ此なよしといふはいわしの事なるへしなよしのかしらは京などにて磯までとは用かたかりなん」

(1) も一本 (2) 是は餅の (3) 塩おし也 (4) 小家

(イ) 魚彦按此いもしを助ていはゝ和名抄芋の条に載以毛加良一云以毛之俗用芋柄<sup>イ</sup>二字芋茎也とあり此いもしを用けんか坂田め伊勢の人より坂手めといふもの送られしを見れば藻の如くほそき物にて火にあふり食味昆布に似たりもし是か後考のために記置のみ (ロ) 鯰和名奈與之 (ハ) 魚彦云鱧魚<sup>ハ</sup>乎己自和名同二日なほおほみなとにとまれり、かうじものさけおこせたり「前の講師のもとより又ものおくりたるへし」

三日おなじところなり、もし風なみのなほしばしとをしむこゝろやあらん心もとなし、

四日かせふけばえいでたゝす、<sup>(1)</sup>まさつらさけよき物たい

まつれり、かうやうにものもてくる人になほしもはあらで、いさゝけ<sup>(3)</sup>わざせさせすものもなし、にぎはゝしきやうなれどま<sup>(5)</sup>くる心ちす、「妙寿本なほしもえあらていさゝけわざせさせ物もなしと有かうやうはかやうをのへたる語也なほしもはあらてとは伊勢物語にたゝなほやはあるへきと侍るに同じく直の字（意か）なるへしたゝにしもえあらての心也いさゝけわざせさせすといさゝかなる事をせさせんすると也是もいせ物語にいさゝかなるわさもえせでと侍るにおなしかるへし」

(1) 妙本昌連 (2) 直也 (3) の (か) (4) む (か) (5) 負るなるへし

五日風なみやまねばなほおなじ所にあり、人々たえすとふらひにく、

六日きのふのごとし、

七日になりぬ、おなじみなとにあり、「久しく有てうめる意なり」けふはあをうまなどおもへどいとかひなし、「仁明天皇の承和元年正月に豊樂院にて青馬を見給ふ同六年正月に紫宸殿にて御覽せらる中世よりは皆白馬をいへり万葉は水鳥のかもの羽の色をあを馬をけふ見る人は命のふといふとあり又青雲のたな引日すらこさめそふる青雲の白かたの津なともいへは青□は白をいふとも見え又右の哥によれば黒鳥の青色なるをむかしはいひしを後にから文によりて白の事にせしか」たゞなみのしろきのみぞ見ゆる、「白波はかり見えて白馬はおもひやるかひもなしとな

り」かゝるほどに、人の家のいけと名ある所より、こひはなくてふなよりはじめて、川のも海のもことのども、ながびつになひつゞけておこせたり、「池は土左の国の郷名也哥によるに池は名のみにて侍り」わかなぞけふをばしらせたる、「白馬も見ねは七日のしるしもあらねと彼おくり物に若菜有てしらせたるとなり延喜十一年正月七日に後院より七種の若菜を供す枕さうしに七日のわかなをむゆかにもて来てこは何そなといふに耳な草とはいふなれとあまたし見れはきくも有けりとやうにのみたれその比まてはその草とは定めすたゞ七くさ用しなるへし」うたありその哥、

あさぢふののべにしあれば水もなきいけにつみつるわかななりけり、「池の女の哥也此池は池にあらねは水もなきといへり」

いともをかしかし、このいけといふは所の名也、よき人のをとこにつきてくだりてすみけるなりけり、「此池の女の事をいへる也」このながびつのものは、みな人々にわらはまでにくれたれば、あきみちてふなこどもははらつゞみをうちて、うみをさへおどろかしてなみたてつべし、「はらつゞみを打てとはたのしめるさま也 莊子馬蹄篇に赫胥氏之時、民含哺而熙鼓腹而遊と云ことあるをよりにや海をさへおどろかしてとは文選海賦云於是鼓怒溢浪云々これにもとつけるなるへし」この間にことおほかり、けふわりごもたせてきたる人、その名

などぞや今思ひいでん、「是はこと人也わりこ和名云カレヒガ楊子今俗所云破子是也以餉送人也その名なとぞやとはその人の名何とそやいひしをわすれたるなり」この人うたよまんとおもふ心ありて也けり、とかくいひくゝて波のたつなることゝうれへいひてよめるうた、「ゆくさきに立白波とよまんとてその料を云なり」

ゆくさきにたつしら浪のこゑよりもおくれてなかんわれやまさらん

とよめるいとおほごゑなるべし、もてくるものよりは哥はいかゞあらん、「破子のしらひのよきよりは哥はおとれりとなり」このうたをこれかれあはれがれどもひとりもかへしせず、しつべき人もまじれど、これをのみいたがり、ものをのみくひてよふけぬ、「妙寿本ましはれゝとこれをのみいたはりとあり痛かりては物をほむる振にてそしる詞也こゝは哥のわろければ却てほめてのみ過して返しめせぬなり」此哥ぬし又まからずといひてたちぬ、「又やかてまゐらんするといとまこひして帰るなり」ある人のこのわらはなるひそかにいふ、まろ此哥のかへしせんといふ、おどろきて、いとをかしきことかな、よみてんやはよみつべくははいへかしといふ、「えよむましもしよまんにはいへとなり」まからずとてたちぬる人をまちてよまんとてめけるを、よふけぬとにや有けんやがていにけり、そもくゝいかゞよんだるといふかしがりてとふ、



此わらはさすがにはぢていはす、しひてとへばいへるうた、

ゆく人もとまるもそでの涙川みぎはのみこそぬれまさ  
りけれ、

となんよめり、「さきの哥にゆくさきにといひおくれてなかんを  
うけてゆく人もとまるもとよめり」かくはいふものか、「童とし  
てかやうにはよむ事かと驚ける也」うつくしければにやあらん  
いとおもはすなり、「子を愛しむ心からにや思の外におもしろき  
哥と也」わらはごとにては何かせん、おんなおきなにをしつ  
べし、「女はをみなをの仮字也こゝは和名抄に驅於無奈と有て老女  
の事也又翁は男老たるをいふのみ然ればこゝは老女老男の哥にし  
つへしとなり」あしくもあれいかにもあれ、たよりあらばや  
らんとておかれぬめり、「捨すしておきたるなり」

(1) 今本かしこし(非) 妙本(よし) (2) 今る(わろし)

妙本(3) 今本なし妙有(4) 愛也(5) 言(6) 助辞

(イ) 魚彦云清少納言草紙に道隆公北の方の事をざれておきな  
女におろしをたに給へとの給ひし事有榮花物語楚王夢の巻にま  
た世の中をむかし見たる女おきなまたかゝるまうなる事見すな  
とそなく／＼申おもへる云々老女を云ならん

八日さはる事有てなほ同し所也こよひ月は海にぞいる、  
これを見てなりひらの君の、やまのはにげていれすもあら  
なんといふ哥なんおほゆる、「古今集にあかなくにまたきも月  
のかくるゝか山のはにけていれすもあらなん」もし海べにてよま

ゝしかば、なみたちさへていれすもあらなんともよみてま  
しや、今此哥をおもひてある人のよめりける、

てる月のながるゝ見れは天の川いつるみなとは海にぞ  
りける

とや、

九日つとめて、おほみなとよりなはのとまりをおはんと  
てこぎいてけり、「つとめては明る時也なは和名土左国安芸郡奈  
半郷と有是也」これかれたかひにくにのさかひうちとはとて、  
見おくりにくる人あまたが中に、藤はらのときざね橋すゑ  
ひらはせべのゆきまさら、みたちよりいでたうびし日より、  
こゝかしこにおひくる、此人々のふかき心ざしは此海にも  
おとらざるべし、「みたちよりいてたうひしとは貫之の御館より  
首途し給ひし日よりと云御は公のたちなれば也」

これより今はこぎはなれてゆく、これを見おくらんとて、  
その人どもはおひきける、かくてこぎゆくまに／＼、海  
のほとりととまれる人もとほく成ぬ、舟の人も見えすなり  
ぬ、きしにもいふことあるべし、舟にも思ふ事あれどかひ  
なし、「こぎゆくまに／＼は漕行まゝに也遊仙窟云行至二三里廻頭  
看数人猶在旧処立余時漸々去遠声沈影滅顧瞻不見測愴而去行到山  
口浮舟而過やまと物語に車は舟のゆくを見てえいかす舟にのり  
たる人は車を見るとおもてをさしいてゝこぎゆけはとほくなる  
まゝにかほはいとちひさくなるまで見おこせければいとかなしか

りけり」かかれど此哥をひとりごとにしてやみぬ、「舟にも思ふ事あれとかひなしとはいへといふ事なり」

おもひやる心は海をわたれどもふみしなければしらすやあるらん、

かくてうだの松ばらをゆきすぐ、その松のかすいくそばくいくちとせへたりとしらす、もごとになみうちよせ、枝ごとにつるぞとびかふ、おもしろしと見るにたへすして、ふなひとのよめる哥、「宇多松原これも猶とさの国也ふなひとは楫取にあらず船の中の人なるへし」

見わたせば松のうれごとにしむつるはちよのどちとぞおもふべらなる

とや、「松のうれは上也どち共也松も鶴もちよふる物なれば千世の友と思ふへきとなり」この哥は所を見るにえまさらず、

(1) 妙大湊 (2) 妙那波 (3) 今本 (4) 妙本言実 (5) 季衡 (6) 長谷部 (7) 行政等 (8) へし (か)

(イ) おはんとて前の大湊を追ふと云所に云 (ロ) つとめては先師後の説風向て也と

かくあるを見つゝこぎゆくまに、山も海もみなくれよふけて、西ひんがしも見えすして、てけのことかちとりの心にまかせつ、「妙寿本ていけの事みなくれば皆かきくれて聞き也てけは天氣也」をのこもならはぬはいとも心ぼそし、まして女はふなぞにかしらをつきあてゝねをのみぞなく、「な

らはぬはとはかゝる海路の旅になれぬは也」かくおもへば、「かく思ふにと云意万葉にあり」ふなこかちとりはふな哥うたひてなにともおもへらす、そのうたふ哥は、

春の野にてぞ、ねをばなく、我すゝきにて、手をきる  
くつんだるなを、おやゝまぼるらん、しうとめやく  
ふらん、かへらや、「かへらや帰らんやと云也先かく云て下を云也」

よむべのうなるもがな、「うなるはなりにて小女也万葉<sup>ウタ</sup>歌<sup>カ</sup>もかなは願の哉也」ぜにこはん、そら<sup>(4)</sup>ごとをして、おぎのりわざをして、ぜにももてこす、おのれだにこす、

「妙寿本よんへの売妹か葉とあるはわるし」

これなみにおほかれどかゝす、これらを人のわらふを聞て、海はあるれど心はすこしなぎぬ、「浪のしづまるをなくと云也心のしづまるにそへていへるなり伊勢物語におほよとのほまにおふてふ見るからに心はなきぬかたらはねとも是なみは此並也」かくゆきくらしとまりにいたりて、「九日のつとめてよりその泊まての事を云なれば夜をかけたる事は中にこもれり」おきな人ひとり、だうめひとり、あるが中にこゝちあしみつゝ、<sup>(6)</sup> <sup>(7)</sup> <sup>(8)</sup> <sup>(9)</sup> ものものしたばてひそまりぬ、「おきな人は老人也貫之みつからいへりたうめは和名に日本紀曰<sup>タニノミヤサキ</sup> 専領<sup>タニノミヤサキ</sup> 二字ノ讀<sup>タニノミヤサキ</sup> (太宇女乎佐女) 又云太宇女者毛波良之古語也今呼老女為太宇女おくに淡路嶋のたうめとあるも源氏に伊賀たうめとあり」

(1) 手を今本なし妙本に有 (2) まうほるにてむさほる也魚彦云ムサ反マ也 (3) 宿夜也 (4) そのうなゐが (5) 今本ならす(わろし) 妙本 (6) 食をも (7) 喰 (8) 給

—— (9) 寐十日けふはこのなはのとまりにとまりぬ、

十一日あかつきにふねを出してむろづをおふ、人みなまだねたれば、海のありやうも見えず、たゞ月を見てぞにし東をぼしりける、かゝるあひだにみな夜あけて、手あらひれいの事どもしてひるになりぬ、いましはねと云所にきぬ〔安芸郡羽根〕をさなきわらは、此所の名を聞て、はねと云所は鳥のはねのやうにやあると云、まだをさなきわらはのことなれば人々わらふに、ありける女わらはなん此哥をよめる、

まことにて名にきくところはねならはとぶかことくに都へも哉〔或人いふ貫之の女に典侍とて哥人有し也〕

をとこもをんなもいかでとく都へもがなとおもふ心あれば、此哥よしとはあらねど、げにと思ひて人々わすれず、此はねと云所とふわらはのついでにぞ、またむかしの人をおもひ出て、いづれの時にかわするゝ、けふはまして母のかなしむ事は、〔妙寿本母の悲しむ事は今本かなしからるゝ事は〕くだりしときの人の数たらねば、ふるきうたに、かすはたらでぞかへるべらなると云事をおもひ出て人のよめる、〔古今集よみ人しらす北へ行属をなくなるつれてこし数はたらでぞかへるべらなる〕

よの中におもひやれどもこをこふる思ひにまさるおも

### ひなき哉

といひつゝなん、〔妙寿本思ひあれとも世の中に思ひめくらしても子をこふるにまさるはなしと也いひてなんとは恋悲しみつゝ行也〕

(1) 土佐国安芸郡室津 (2) 一本さま (3) 今也しは助 (4) 今本わかきわらはとはあるはあしゝ妙本 (5) 言 (6) 今本わらふときに (7) 一本とそいへる

(イ) 源氏蜻蛉巻にあしすりと云事をしてなくさまわかきことものやうなりと有

十二日あめふらす「ふるべき雲のけしきにてふらざりしなるへし」文時、維茂か船のおくれたりし、「貫之の子に時文とてありしは梨壺の七人の内也もしこれを文時とかけるにや但諸本かくのことくなれば今改めかく侍り又紀氏の比に菅三品を文時といひ平維茂など侍しにや此人々にてはいかてかあらんたゝ貫之の類船の人々なるへし」ならしづよりむろづにつきぬ、〔安芸郡奈良志〕

### (1) 妙本鳴津

十三日のあかつきにいさゝかに雨ふる、しばし有てやみぬ、〔妙寿本十三日暁いさゝか雨ふる昨日十二日に雨ふるへくてふらざりしかけふ少し降しにや〕をとこ女これかれゆあみなとせんとて、あたりのよろしき所においてゆく、うみをみやれば、

くももみな浪とぞ見ゆるあまも哉いづれか海ととひて<sup>(1)</sup>

しるべく

となんよめる、さてとをかあまりなれば月おもしろし、船にのりはじめし日より、ふねにはくれなるこくよきぬきす、それは海の神におちてといひて、「上へかへる語也」なのあしかげにことづけて、はやのつまのいすしすしあはひをそ、心にもあらぬはぎにもあげて見せける、「なにのあしかげは何□の御かけにあはふとて□云か海辺故にあしを出せしのみ或人云なにはの芦かけにならひての心かといへりはやの云々は老海鼠の鰯の飯餅也心にもあらぬ云々は海人女とものはぎまであけたるが也わさとあげねど波にも入るゆゑにはきにもあくへし又もと短きを志しにも有へきをいふのみ見せけるは飯ずしあはひなとをいふ

(1) 今本へ(わろし)(2) 今本哥よめると有哥は衍字なるへし  
(イ) 此かけは君かみかけにますかけはなしのかけ也おちくほ物語くゝりをはきにあげて来つるに云々古今俳諧哥いつしかとまたく心をはきにあげて○これめせとて見る也

十四日あかつきより雨ふれば同じ所にとまれり、ふな君せちみす、さうじものなければ、うま時よりのちに、かちとりきのふつりしたひに、ぜになければ、よねをとりかけておちられぬ、「船君はその船中の主君をいふへし妙寿本に節忌とあり精進の事也さうじものは即精進の食物也十四日斎日也ことに正月五月九月は年ン三ンとて持戒精進して一切の罪を消滅すへきよし仏書に侍り貫之は六斎をつゝしめるにや二月八日にもせち

みせしよしおくに見えたりよねをとりかけては米にて取かへ買たる也おちられぬとは船君の船中不自由にてさうじものなきゆゑに朝精進はかりにて落しと也」かゝる事なほありぬ「妙寿本おほくありぬ斎日のたびに不自由故に落られし事猶有し也」かちとりまたたひもてきたり、よねさけなどくる、かちとりけしきあしからず、「くるは下しあたる也」

(1) 妙本節忌

十五日けふあづきかゆにす、「拾芥云世風記云正月十五日亥時煮小豆粥為天狗祭庭中案上則其粥凝時向東方再拜長跪服之終年無疫氣公事根元に寛平の頃より年毎にこれを奉るその外三月三日などの御節会供も此時より同く定らる七種のかゆとは白穀大豆小豆粟柿小角豆など也九条殿御記に見えたり」くちをしく猶日のあしければるざるほどにぞ、けふはつかあまりへぬる、いたづらに日をおくれれば、人々海をながめつゝぞある、「あざるほどにとは源氏にるざり出たと侍る」めのわらはのいへる

たてばたつるればまたあるふく風と波とはおもふどちにやあるらん、

いふかひなきものゝいへるにはにつかはし、

(1) 今本ふれは妙本同 (2) 今本いと

十六日風波やまねばなほ同じ所にとまれり、ただうみの波なくして、いつかみさきと云所「是も安芸郡御崎」わたらんとのみおもふ、風波とににやむべくもあらず、ある人の此

波たつを見てよめる哥、「とには頼に也」

霜だにもおかぬかたぞといふなれど波のなかには雪ぞ  
ふりける、

さて船にのりし日よりけふまでに、はつかあまりいつかに  
なりにつけり、「十二月廿一日より正月十六日まで也十二月小の晦  
日也」

(1) むろつ也 (2) 妙本ともに

十七日くもれる雲なくなりて、あかつきづくよいともお  
もしろければ、船を出してこきゆく、此あひだに雲のうへ  
も海のそこも同じごとくになんありける、むべもむかしの  
をのこは、さをはうがつ波のうへの月を、船はおそふ海の  
うちのそらをとはいひけん、きゝざれにきけるなり、「玉屑  
云高麗使過海有詩云水鳥浮還没山雲斷復連賈島詐為梢人聯下句云  
棹穿波底月船厭水中天麗使嘉歎久之自此復不言詩きゝざれにきけ  
るとは妙寿本聞去と書きさらしのらしの反りなりそれをれに転し  
て云にて聞去也聞流しに聞てそらにはよくもおほえすといふなる  
へし」またある人のよめる、

みなそこの月のうへよりこぐ船のさをにさはるはかつ  
らなるべし

これを聞きてある人またよめる、

かげみれば波のそこなるひさかたのそらこぎわたる我  
ぞわびしき

かく云あひだに夜やうやくあけゆくに、かちとりらくろき  
雲にはかにいできぬ、風ふきぬべし、み船かへしてんとい  
ひて船かへる、此あひだあめふりぬいとわびし、

(1) 又むろつ也

十八日なほ同じ所にあり、海あらければ船いださす、此  
とまりとほく見れどもちかく見れどもいとおもしろし、か  
れどもくるしければなにごともおもほえず、をところち  
は心やりにやあらんからうたなどいふべし、船もいださで  
いたづらなればある人のよめる、「心やりは思ひをやりうしな  
ふを云万葉に思ひやるといふ是也詩に遺悶といふも是也大和物語  
にかたをかに蔽もえすは尋つゝ心やりにやわかなつままし」

(1) いそふりのよするいそには年月をいつともわかぬ雪の  
みぞふる、

此哥はつねにせぬ人の言也、又人のよめる、風による波の  
いそにはうぐひすも春もえしらぬ花のみぞ咲、「波のいそは  
少しおほつかなし」

此哥どもを少しよろしと聞て、ふねのをさしける翁、つき  
ごろくるしき心やりによめる、「ふねのをさは舟長也船中のつ  
かさする心也貫之を云へし月ごろくるしきはあるか中に心ちあし  
みしてとある首尾也」

たつなみを雪か花かとふく風ぞよせつゝ人をはかるべ  
らなる、「初の二首に波を雪によみ花によみなせるを引合せ

てよめる也はかるとは人をあさむく也」

此哥どもを人の何かと云を、ある人聞ふけりてよめり、その哥よめるもじみそもじあまり七文字、人みなえあらでわらふやうなり、「夜のふけ樂にふけるなと云皆深き也こゝもその哥どもをはむるを聞て我も深く思ひてよめると云にや」うたぬしいとけしきあしくてえず、「えすとは心得ず<sup>た</sup>らたちたる也」まねべどもえまねばず、かけりともえよみあ<sup>3</sup>へがたかるへし、けふだにかくいひがたし、ましてのちはいかならん、「妙寿本えよみあへかたかるへしけふたにかういひかたしましてそのうちにはいかゝあらんと有彼三十七字の哥の書へきやうなくわけなかりしとの心也」

(1) 妙本磯触 (2) 長 (3) 今本すゑ(あしし)

(イ) 今見るにたゞそらをかきりに海は見ゆ

〔未完〕